

私立短期大学図書館協議会

会報

Bulletin of Junior College Library Association

編集者
菅原春雄
発行者
もり・きよし

私立短期大学図書館協議会

1981.12.NO9

短大図書館の電算化によせて

渡辺 敏一

去る10月末、浦和市で開かれた全国図書館大会のなかで、私が強い印象をうけた出来事が二つある。

一つは、JLAの大学図書館部会と短大図書館部会が共催した、「学術情報システムと大学図書館」と題する講演会でのことである。質疑応答のとき、短大図書館員の質問に対して、講師の田保橋彬氏（文部省情報図書館課長）は、現在わが国で進めている学術情報システムに、短大図書館を組込むつもりはない旨の回答をされた。私自身は都合により、この講演会に出席することが叶わなかったが、幾人かの参加者からこの話を聞き、短大図書館員の一人としてある種の公憤を覚えたものである。しかし、その後時間が過ぎるにつれて、現下の短大図書館界は、資料や予算等の図書館基盤の面で、また電算機導入による業務の機械化・近代化の面で、大学図書館界などに比べ大きく立遅れており、ある程度はやむをえない判断でもあるような、複雑な想いとらわれてきている。

この出来事とは逆に、私ども短大図書館員を大いに勇気づけてくれたのが、「国学院大学栃木学園図書館の電算化システム」に関する片山喜八郎氏の発表であった。同図書館の電算化システムについては、本協議会刊行の『短期大学図書館研究』にも、既に一部紹介がなされている。しかし同図書館では、その後も次々と創意工夫を凝らして業務の電算化に取組まれ、現在開発中のものを含めれば、電算機処理業務は次のように多岐にわたっている。①貸出管理（貸出・返却・予約・延滞・統計）②予算管理（発注・納本・受入・会計）③雑誌管理（所蔵雑誌目録の作成も可）④情報検索（蔵書の書名・著者名・分類順リストの作成も可）⑤その他

このような多様な業務処理を、わずか60万円程度のマイコン・システムにより実現していることは驚くべきことである。ないないづくしの短大図書館にあって、電算機の便利さは分っていても、なかなか導入できない理由の一つに、その予算規模に比べて電算機の値段が高すぎることがある。この点において、同図書館の実践例は、ま

さに短大図書館の電算化に福音をもたらすものといえよう。また、図書館業務の電算化を阻む主な理由としては、プログラム開発の困難さが存在する。これについても、同図書館では、市販のマイコン用プログラムパッケージ・プログラムを創造的に活用され、それほどの苦勞なしに次々と電算化を図ってきている。（例えば雑誌管理等の場合は、市価3万円弱のパッケージ・プログラムを活用されている）この面での実践は、電算化にあたってそれほど高度の知識を必要とせず、しかも安価にプログラムを開発できることを実証しており、人員不足などで電算機の勉強もままならない短大図書館にとり、まさに注目すべきものといえよう。なお国学院大学栃木学園図書館で開発されたプログラムについては、短大図書館界の電算化のお役に立ちたいという同図書館の好意により、私立短期大学図書館協議会がそっくり丁載しており、ご要望の図書館へは僅かな金額で頒布している。なおこの件の詳細については、本協議会事務局へご相談いただきたい。

ところで、わが国の短大図書館で現在電算機を導入しているのは、前記の国学院大学栃木学園図書館（昭和54年に稼動）と、東京女子大学短大図書館（昭和54年に稼動）、および山形女子短大図書館（昭和56年に稼動）の3館に限られるようである。因みに、これまで紹介されることのなかった山形女子短大図書館のシステムについて、ごく簡単にふれてみたい。同図書館では漢字処理能力を有する高価なオフィス・コンピュータ(MELCOM 80シリーズ・日本語)を導入しており、現在は貸出管理と図書の入業務の処理を行なっている。このシステムの特徴は、何ととっても漢字による業務処理が可能なことであり、昭和57年秋頃までには、わが国短大図書館で初めての漢字による蔵書管理が完成する予定といわれる。その他、女子聖学院短大図書館では、電算機を所有していないが、コンピュータ会社と契約を結び、バーコード・リーダーを使った蔵書点検を行なっている。なお同図書

館では、このたび新機種に更新される学内コンピュータを使って、図書館業務を電算化することを検討中と聞く。また淑徳短大図書館、目白学園女子短大図書館、関東学院女子短大図書館、東筑紫短大図書館でも、目下図書館業務の電算化を検討中の模様である。

このような動きは、数年前の短大図書館界では全く見受けられなかったことであり、今後はその動きにますます拍車がかかるものと思われる。ところで、何の品物でもそうであるが、一人よりも多人数で共同購入すれば、値段は割安となる。とりわけコンピュータの場合は、既して価格が高価であること、また現下のコンピュータ市場は売り手が過当競争の状況にあることなどを考慮すると、複数館が共同して同一機種を購入すれば、価格面でもかなりの値引を期待することができよう。またプログラム開発についても、メーカー等に外注すると多額の費用がかかるが、複数館で業務処理の内容や方法の統一を図り、共同でプログラムを開発すれば、一館当りの経費負担は激減する。(例えば開発費が500万円のプログラム

を、10館で共同開発すれば、1館当りの負担は50万円ですむ) 予算規模の小さな短大図書館にとって、かかる電算機導入経費の負担減は大いに魅力がある。また、このような電算機導入時の協力は、その後において図書館間の業務処理の標準化や、図書館相互協力の進展へとつながっていく。については、私立短期大学図書館協議会では、電算化に伴う短大図書館間の協力のために労を惜しまないとのことである。そこで、電算化を目下検討中の図書館はもとより、これから検討に入られる図書館も本協議会へ積極的に情報を提供されることをお願いしたい。

一本の頼りなげな藁でも、多くを集めて糾えば太い柱にもなり得る。これから始まろうとする短大図書館界の電算化の場面で、是非ともこの格言をわれわれの手で実証してみたいものである。そして、高等教育に関わる図書館でありながら、学術情報システムから除外されるといふ今日の悲哀を、明日の短大図書館で味わうことのないようにしたいものである。

(東京女子大学短期大学部図書館)

雑誌総合目録の効用についての断想

一分担保存の第一歩を！

瀬古輝子

最近、短大図書館界でも、雑誌の総合目録作成の動きが高まり、昨年には、関東、甲信越地区及び近畿地区で、相次いで刊行された。以後、この一年間で本学でも文献複写10数件、貸出も数件受付けた。こんな小さな図書館でも、役に立てるのだなあと思無量である。大半は普通の文献複写だが、中に、非常に積極的な利用法があったので紹介したい。というのは、自館の欠号部分を、所蔵館から借り出し、コピーして補充するのだ。なあんだ、と思われるかもしれないが、頭でわかっていても、仲々実際にはやれないことだ。必要な箇所が一冊だけぬけている時程、がっかりすることはない。よく使われる雑誌だけでも、試みてはどうだろうか。

また、もう一つの利用法、これは、昨年、東樟蔭を退職された上田栄子さんが、希望として話してくれたことなのだが、彼女が図書館を去った今、この名案を是非共、実現させたいと思っている。

一口に言えば、コンテンツサービスを、館同志で行うのである。原則として、相互交換の形が、公平でよいと思う。各館での資料費は限られているので、教員が欲する雑誌を十分に備えることは出来ない。しかし、その教員が、雑誌全部を必要とするわけではないから、コンテンツを毎号送ってもらい、必要論文のみ、文献複写依頼をするのである。現在、短大図書館の大きな問題として、

教員とのコミュニケーションの必要が叫ばれている。教員の関心を図書館に向けさせるには、教員にとっても、たよりになり、役立つ図書館であることが第一である。上記のコンテンツサービスは必ず、拍手をもって迎えられると思う。

最後に、この雑誌総合目録を手がかりにして、雑誌の分担保存の第一歩を、一館一館で、ふみ出せないものだろうか。出来上がった雑誌目録をながめて、まず思ったことは、欠号が多く、所蔵巻数が少ないということである。

もっともこうして総合目録のかたちになってしまえば、欠号があろうと、所蔵巻数が少なかりょうと、利用する側としては支障はないと言えるし、総合目録の意義も、そこにあるわけだけれど、個々の図書館の評価としては、やはり問題なのではないだろうか。欠号を生じる原因は、言うまでもなく、管理の不行届きである。

製本費不足や、使い易さのために、製本しないで保管している。それを教員が、手続きなしに貸りてゆく。

また、所蔵巻数が三年にも満たないものが多く目につく。これは、教員が入れかわると、いさぎよく、今迄購入していた雑誌を切り捨て、また新しく取り始めるものもバックナンバーまでは手が届かないためである。

学術雑誌は、どのように選択されているのだろうか。教員個人の必要にまかせている館も多いように思う。

その短大の学科として、基本的な学術雑誌を決め、それだけは、少々無理を押しても、購入し続けるという見識が図書館にあってもよいのではないだろうか。

相互利用が進みつつある今、各館で、欠号だらけの、所蔵もわずかな雑誌を、後生大事にかかえこんでいる時代ではないと思う。

そこで分担保存を切望するのだ。地区毎に雑誌目録を作るのは、分担保存を進める一つの過程と考えたい。

即ち、分担保存のためには、まず、各館の所蔵を知ることが必要だからである。各地区が、この過程を経て(必ずしも雑誌目録という形にしないでもよいと思う)、分担保存を進め、その成果をひきさげて、最終的に、学術雑誌総合目録に並ぶ、短大全体の総合目録作成に臨むというのが、順序として理想的である。

分担保存は、組織的にも、早急に着手されなければならないが、それ以前に、自館に不用のものや、所蔵の少ないもの、欠号の多いもの等は、思いきって除籍して、他館の欠号補充にあてることを考えてはどうだろうか。

「スペースの限界」は多くの短大図書館の悩みである。資料を減らすことを積極的に考える時期がきていると思う。今までに述べた三点は、組織的な呼びかけを待たずとも、今すぐにでも取りかかれる事である。

幸いに、地区の研修会で、顔見知りの人も増え、気軽に頼める状態になりつつある。この横のつながりを、大いに活用して、八方ふさぎの状態から抜け出るきっかけを、早くつかみたいと願っている。

(帝塚山学院短期大学図書館)

＜ 会 員 校 の 声 ＞ - 第 6 回 -

原稿を依頼された折、まず何を書こうかであれも、これもと迷ってしまい筆がなかなか走りませんでしたが、今年度新たに賃貸契約を結んだ複写機導入に際し、本学図書館の実状、特色などをふまえて書かさせていただきます。

『私立短期大学図書館総覧』でも分る如く、ほとんどの図書館が“複写機”を備えられています。ただ、単に複写機といっても、目的・用途・予算等により機種はさまざまだと思います。私の所では、三年前初めてF社の乾式複写機を導入しました。当然比較機種としてU社がありました。図書カードが確実にコピー出来、(原稿をベースに、著者・書名・分類・配架・基本カードの五枚が基本)かつ、普通紙も複写可能というのが条件で、製造年は古かったのですがマルチ複写可能という点でF社に決定したわけです。

それから三年たった今、機械の老朽化著しくミスコピーも多くなり、レンタル契約満了に近くなったので、継続するか、新機種にするかでかなりの検討が重ねたわけです。マイコン時代の時節柄、機械の成長も日進月歩を極め、かえって思案がのつった一時期もありました。

今回はF・U・R社三社のデモンストレーションを試みたところ、複写方式、原稿の多種類さ、最大原稿サイズ(A3)、連続複写等は皆同じでしたが、仕様比較で大きく異なったのは原稿台固定のと移動式、厚物複写が連続可のと手差し一枚可の二点だったように思います。

更に複写能力からみると、図書カードの送り装置の内容面、鮮明度、コピーツーコピーの具合でやはり差が出たわけです。勿論図書カードを別の専用機で使用してお

られる館にしてみれば、何をそんなに……と思われるかもしれませんが、非常に厳しい予算内で向う三年間はベターに、と思いますとついつい細かな点にまで目を配る必要があったわけです。

三種比較といっても同程度の価格ではなく、ご承知の方も多いとは思いますが、原稿台移動式のは予算面からは割安です。ただ、難点は普通紙の場合は問題ありませんが、ブックものをとるとき、真ん中に光が入るため上から黒い布でおおってくれという業者の声、又連続コピーのとき原稿をきちっと押さえていないと焦点ボケもありえますし、ここが一つのポイント(ネック)になったわけです。

結果的には、U社の機種で三年リース契約をしたわけですが、“リース”という単純そうで書式上は、はん雑な点もあり迷った事もありました。後から思うのに、業者はプラス面しか言って来ませんので、受入側も充分対応出来るよう勉強していないと後悔しては何もなりませんので……。見ばえ、アクセサリ的な表示にまどうことなく、何が目的で複写機を選ぶのか、の原点に戻ったとき答は意外とスムーズに出て来そうな気がします。一つの参考になれば、と思いつつ筆をおきます。

(天野信定 大垣女子短大図書館)

松蔭女子学院大学 図書館
松蔭女子学院短期大学

本学は、1947年神戸市の中心地葺合区（現中央区）に創立されて以来34年の歴史を有し、現在英文学科、服飾学科、家政学科の3つの学科に1000余名の学生を擁している。さらに、1966年には4年制の大学が垂水庄に増設され、英米文学科および国文学科の2つの学科で現在1000余名の学生が在籍している。

それぞれの大学には独自に図書館を所有し、まったく別個の活動をしていたが、1981年4月両大学の統合学会が灘区の六甲山麓に落成したのを機に図書館は合体し、共同利用施設として生まれかわった。短大だけの図書館ではないので、以下にのべる数値は大学も含めたものとして算出している。

図書館設計の基本的方針

1. 全館開架とする。
2. ブックディテクションシステムを導入する。
3. レファレンスおよびコピーサービスの充実をはかる。
4. 視聴覚資料施設を充実する。

建物および設備の概要

1. 型式 鉄筋コンクリート4階建（本館）および同2階建書庫（積層5層）
2. 区画 図書館（1～3階）および研究室（4階）
3. 面積 総床面積 2,956㎡
内訳 閲覧用スペース 2,566㎡
事務用スペース 390㎡

4. 坐席数	総数	353席
	内訳	閲覧室 207席
		新聞雑誌室 48席
		視聴覚室 44席
		ラウンジ 18席
		その他 36席（特関・学研）

図書館の規模

1. 蔵書量
図書 100,575冊
内訳 和書 72,364冊
洋書 28,211冊
雑誌 283種
内訳 和雑誌 195種
洋雑誌 88種
2. 奉仕対象者 2,479名
学生 2,206名
内訳 大学 1,123名
短大 1,083名
教職員（非常勤も含む） 273名
内訳 教員 213名
職員 60名
3. 館員 12名（館長を含まず）

以上

《地区協議会活動報告》

<北海道地区>

当地区では今年度の研修会を、さる9月12日（土）の午前9時30分から12時まで、また講演会を午後1時30分から3時30分まで、それぞれ札幌市教育文化会館において開催した。

午前中の研修会では、冒頭で“短協北海道地区協規約”の一部改正を提案と承認があり、つづいて研修にはいった。この日の研修題目として各館からつぎのような事項が提出された。

1. 「北海道地区所在逐次刊行物総合目録」の作成
2. 相互協力体制の実情について
3. 学生の図書館利用の増大促進について
4. 各館の蔵書構成について
5. 選書の方法について

また、午後からは“いまの子どもたちと図書館”について東京子ども図書館理事長・児童文学者の松岡享子先生の講演が行なわれたが、これには道内の各館種からの参加者も多く、特に今回は、札幌市を中心に活発な活動をしている地域文庫・家庭文庫関係者の協力もあり盛会の裡に終了した。

<東北地区>

<報告 1>

私短協東北地区協議会の昭和56年度研修会を、57年1月下旬、秋田市所在の聖霊女子短期大学図書館（館長北条忠雄教授）において開催を決定している。開催を57年1月に予定したのは、同図書館の新図書館が本年11月末に竣工し、その後、館内諸整備が実施されるためで、翌57

年1月には新装成った新図書館を見学旁研修会をより有意義に開催するためである。

研修会の諸テーマについては、目下、幹事館（仙台、白百合短大図書館長宮城 清先生）、会場館（秋田、聖霊女子短大図書館長北条忠雄先生）、理事館（山形女子短大図書館 中村）の三者の間において、鋭意、準備を進めている段階である。東北地区協議会においては、研修会毎に開催地を変更して、それぞれの地域性に応じた検討と切磋琢磨に努めることを申し合わせており、秋田市における研修会は、開催地仙台・青森・山形・福島に次いで通算5回目の東北地区協議会の研修会となる予定である。

<報告 2>

東北地区協議会においては、短大図書館の長期的展望と発展計画を予想し、図書館の近代化(機能化・機械化)を標榜してきたが、特に理事館（山形女子短大附属図書館）においては、学長・副学長を中心とした学園当局者の非常な理解と英断によって、本年4月よりコンピュータと、ブックディテクション・システムが導入された。

機種は三菱MELCOM-80/28N他附属機器一式の「ハード装置」と、「ソフトウェア開発費」一式の諸費用をふくめて、合計2400万円であった。ファイル収納能力は、

- ① 図書マスター 10万冊
- ② 利用者マスター 3000人
- ③ 常時貸出し冊数 5000冊

コンピュータの開発の早い現在では100万円程度のマイコンに付属機械をつければ一応の事務処理は可能である。

ただし、同時に多種のプログラムをセットすることは不可能である。この機種の選定も長期展望によったものである。現在、コンピュータ導入後半々年であるが、現在のプログラム内容は①閲覧業務（貸出し、返却、予約、延期、督促）②図書資料の検索（書名による検索は明年度より）③統計処理（日計、月計、既計）④蔵書点検という状況であるが、57年7月末にはMELCOM80機種 of 全能力が稼働できる予定である。

一方、住友スリーエム株式会社（3M）による「ブックディテクション・システム（モデル1850）」は、コンピュータと同時に設置以来、図書館の資料管理の確実化と適正化に威力を発揮しつつある状況である。（N）

<関東甲信越地区>

昭和56年度に入り主な活動も行なわないで今日にきましたが、明年3月中旬、講演会と総会を開催する予定で検討しております。また幹事会を早々にもって、今後の活動方針を練っていきたいと思っております。

<東海・北陸地区>

<雑誌目録編集委員会>

○第1回

日 時：昭和56年7月1日（水）13時-16時

場 所：愛知淑徳短期大学

出席校：9校

○第2回

日 時：昭和56年9月17日（木）13時-15時

場 所：愛知淑徳短期大学

出席校：7校

○協議内容

1. 編集及び記入要領について
2. 浄書作業分担について
3. 浄書作業終了予定 昭和56年12月20日

<会報6号 34頁 150部 56.7.1.発行>

内容：巻頭言（安城学園女子短大：石田はつみ）、昭和55年度第2回研修会記事、瑞穂短大図書館見学記、図書館の近況（東海学園女子、中部女子）、昭和56年度第1回研修会記事、整理事務の省力化についての実状発表（瑞穂、一宮女子、愛知淑徳）、会員名簿、役員名簿、図書館職員名簿、事務局報告、昭和56年度研修会資料（図書整理業務についての調査表）。

<昭和56年度第2回役員会及び昭和56年度総大会>

日 時：昭和56年11月4日（水）10時20分～16時

場 所：名古屋短期大学

参加者：16校（加盟校15校）29名

○役員会（8校）

総会提出議案について審議決定。

○総会

議 長：名古屋短期大学付属図書館長 名倉静一氏
協 議

1. 昭和55年度事業報告並びに決算報告
2. 昭和56年度事業計画並びに予算案
3. 地区雑誌目録刊行について

(1) 収録校：29校

(2) タイトル数：和雑誌 約1440点
洋雑誌 約570点

(3) タイトル：「東海・北陸地区私立短期大学雑誌目録」

(4) 収録年月日：昭和57年2月1日現在

(5) 刊行部数：500部

(6) 印刷方法：活版印刷

4. 昭和57年度総大会会場校

北陸学院短期大学

5. その他

1.～3.について原案どおり承認された。4.について開催時期は、8月下旬～9月初旬の予定。

○見学(名古屋短期大学附属図書館)

オリエンテーション用のスライドを見たのち、昨年度新しく開館した図書館を見学した。

○講演会

演題：図書館界の動向

講師：私立短期大学図書館協議会 常任理事

安部 竺己氏

主に「図書館事業振興法」についてお話があった。

詳細は地区会報7号に掲載。

○研究会

1. 図書整理の雑感(整理事務の簡素化)

愛知淑徳短期大学附属図書館 事務長 林 勇一氏

主に地区会報6号、昭和56年度研修会資料「図書整理業務についての調査表」にそってお話があった。

<近畿地区>

<第10回研修懇談会>

日時：昭和56年7月30日

総会 14:00～14:10

研修会 14:10～16:00

会場：平安女学院短期大学

参加館：25(49名)

<総会>

会計監査谷口泰枝氏(京都芸術短大)逝去にともなう、後任の会計監査の選出。

会計監査校 光華女子短大

<研修会>

テーマ：NDCの諸問題

講師：浅野十糸子先生(堺女子短大)

NDC8版補助表の形式区分、主分類区分、時代区分

についての問題点を指摘してもらった。

テーマ：洋書のはなしあれこれ

講師：尾道潤一氏(尾道書店)

洋書の総代理店、洋書の見計い、洋書の古書店、予約雑誌の欠号等について座談風に話してもらった。

<雑誌目録編集委員会>

7月30日、補遺版に関する第2回編集委員会を開き、原稿作成の分担をきめる。9月下旬に原稿が完成し、11月中旬初稿ができあがる。11月26日、第3回編集委員会を開く予定。

<第11回研修懇談会>

本年4月竣工した松蔭女子学院大学、松蔭女子学院短期大学図書館を見学した。参加校34校、出席者48名

<中国・四国地区>

1 中国・四国地区における私立短期大学図書館協議会未加盟館の24短期大学に対し、入会加盟の勧誘文書を発送(56,7,17)

2 昭和56年度協議会会費の納金依頼書を発送(56,7,17)

3 徳島工業短期大学から私立短期大学図書館協議会に入会申出(56,7,28)私立短期大学図書館協議会事務局に報告(56,10,2)

4 短大図書館研究3号原稿募集について、各加盟館に連絡(56,9,16)

5 私立短期大学図書館協議会中国・四国地区役員の変更について加盟館に投票依頼状発送(56,11,12)

6 昭和56年度地区事業計画については加盟館と協議中

<九州地区>

昭和56年度の地区協議会を、57年1月に開く予定で準備をすすめている。

《事務局報告》

1. 全国理事会懇親会

日時：昭和56年10月29日(木)午後6時半～

会場：埼玉県浦和市「ふか川」

出席：会長・理事・地区理事・幹事 12名

内容：役員相互の親睦と、本協議会主催の研修会についての意見交換。

2. 本部役員会

○昭和56年度第4回役員会

昭和56年9月18日 於 日本図書館協会

報告事項

1) 会勢

2) マイコン・プログラム頒布の件

3) 地区協議会の活動

協議事項

1) 『短期大学図書館研究 第3号』編集の件

2) 「図書館事業振興法(仮称)」の件

3) 本部役員会の役員と任務の件

○昭和56年度第5回役員会

昭和56年10月16日(金) 於 日本図書館協会

報告事項

1) 会勢

2) 地区協議会の活動

協議事項

- 1) 本部役員会の役員(幹事)の増員の件
- 2) 『短期大学図書館研究 第3号』編集の件(継続)
- 3) 本協議会主催の研修会(昭和57年度予定)の件

○昭和56年度第6回役員会

昭和56年11月19日(木) 於 日本図書館協会

報告事項

- 1) 東海・北陸地区で11月4日総大会開催
- 2) 近畿地区で松蔭女子学院短大を見学
- 3) 全国理事会、10月29日浦和で開催

協議事項

1) 短大図書館研究第3号の件

2) 昭和57年度研修会開催計画について

期日:昭和57年5月末~6月(JLA総会前後)

対象:短大以外も含む

テーマ:コンピュータ化も加味した機械化・合理化

参加費:会員と非会員で区別

3) その他

JLA短大部会から「学術雑誌総合目録」への短大参加を文部省に、短大部会・公・私立短大図書館協議会の連名で働きかけたいという申出があり、本協議会は賛成。

短

信

◇本部役員補充

幹事 中林 美智子氏(目白学園女子短大)

高橋 道 枝氏(鶴見大学女子短大)

◇片山喜八郎理事 相談担当理事に

本部役員会で、以前から「何でも相談コーナー」を設けて加盟館の悩みや相談に応じようとして進めてきたが、今回より実施することにしました。日常業務等で何か困っていることや、また相談したいことがありましたら、どうぞお気軽に相談くださいますようお願いいたします。相談・問合せはなるべく文書でお願いします。

○片山喜八郎先生

〒328 栃木市平井町608

国学院大学栃木短大図書館内

○本部事務局

〒181 東京都三鷹市牟礼4-3-1

東京女子大学短期大学部図書館内

㊞上記いずれかにおたずねください。

◇昭和57年度会費¥8,000円になる

これは56年度総会で決定され、すでに会報8号でもおわかりと思いますが、いま来年度予算編成時でもありますので、もう1度確認しておきたいと思います。また57年度全国研修会が東京で予定されておりますので、出張旅費関係につきましても計上されておけばよろしいかと存じます。なお会費納入につきましては各地方理事校へ納入方お願いします。

◇私立短図協第1回全国研修会

57年JLA総会時前後に開催

期日:昭和57年JLA総会時前後

場所:東京都内

参加費:加盟館5,000 非加盟館10,000

研修テーマ:仮「短大図書館の運営-省力化と合理化-

内容:短大図書館の現実の問題、また将来の課題として取りくむ問題は、図書館における運営体制の確立であります。つきましては、その確立のためには基盤整備と改革がなければなりません。そこには当然ながら省力化、合理化をすすめていかなければなりません。省力化・合理化の解決として、ひとつには機械化の問題があります。今回は日常業務における機械化、合理化の事例発表をもとに討議を進めてゆきたいと思います。また最近話題のマイコンの実演などまじえながら有意義な2日間の研修を実施したいと考えております。

第1日 主として日常業務における整理の省力化

第2日 主として機械化(マイコンによる省力・合理化)

◇短大図書館研究第3号来春早々刊行

会報8号でお知らせしましたように、紀要第3号が、来春早々に刊行されます。今回も加盟館関係者のご協力で多数の応募いただきありがとうございます。たゞいま第3号編集委員長有岡章氏(鶴見大学女子短大)以下本部役員が編集委員として編集作業をすすめております。

◇加盟館56・11・20現在215館となる

北海道15・東北11・関東・甲信越68・東海・北陸24・近畿49・中・四国22・九州26・計215

私立短期大学図書館協議会新加盟館 (第8号以下追加)

昭和56年11月20日現在

短期大学図書館名	〒	住 所	連絡責任職	氏 名
青山学院女子短大	150	渋谷区渋谷4丁目4-25	図書係長	中条 京子
奈良文化女子短大	635	奈良県大和高田市連中町	事務職員	河野 秀雄
徳島工業短大	779	-01徳島県板野町犬伏蓮花谷100	庶務担当	近藤 吉克

私立短期大学図書館協議会出版物案内

○私立短期大学図書館総覧

1979.3.31発行

B5判 700頁

頒布価格 3,500円(送料共)

○会 報 年2回

現在9号

○私立短期大学図書館総覧—集計・分析—

1980.10.31発行

B5判 66頁

頒布価格 2,500円(送料共)

○マイクロコンピューター・プログラム

(NEC PC 8001用)

(図書館の貸出管理・予算管理・雑誌管理)

頒布価格 30,000円

○短期大学図書館研究 年1回

1号 80.3.31発行

2号 81.3.31発行

B5判 90頁

頒布価格 1号 1,700円(送料共)

2号 2,300円(送料共)

問合せ:

〒181 東京都三鷹市牟礼4-3-1

東京女子大学短期大学部図書館内

私立短期大学図書館協議会

電 話 0422-45-4145

販売取扱:株式会社 新日本印刷

〒105 東京都港区 ノ門1-25-12

電 話 03-503-0428

○関東・甲信越地区私立短期大学図書館雑誌紀要総目録 1980 兼目恵子編

55.7.31発行 B5 253頁 頒布価格 3,300円

発売:〒328 栃木県錦町5-26 ふろんていあ 電話 0282-24-6081

○近 地区短期大学雑誌目録 1980.3月末日現在 55.9.1発行

B5 194頁 頒布価格 3,000円

発売:丸善大阪支店または申込はお近くの丸善へ

～原稿をお寄せください～

会報創刊以来連載として「短大図書館めぐり」「会員校の声」を毎号記載しておりますが、その他新館紹介、随筆、自由投稿の声の欄や資料重複交換コーナーなど、また資料紹介、小さなニュースどんなことでも結構です。会報は原則として年2回、7月と12月刊行ですので、締切は別に定めませんので、思いつくり、随時送付していただければありがたいと存じます。会報は会員校の情報誌として有効に利用されますよう、御協力、御支援をお願いします。

編集後記: 会報第9号をお届けいたします。今回当協議会事務局をしておられる渡辺先生(東京女子大学短期大学部)からご執筆していただきました。短大図書館における今日的課題として解決しなければならないネットワーク、相互協力と係わりのある、また前提となる基盤整備として合理化、キカイ化も考えて行かなければならないと思います。その方向づけや考え方を論考していただきました。これからの短大図書館の運営を考える場合の指針にもなるかと思えます。瀬古先生(帝塚山学院短大)には、雑誌目録の編集から発展した分担保存の点を述べていただきました。いずれも将来の課題として注目するものです。これからは館種をこえたネットワーク、あるいは図書館の振興を考えていかなければならない時期にきているのではないかと思います。(すがわら)

発行所 私立短期大学図書館協議会 〒181 東京都三鷹市牟礼4-3-1
東京女子大学短期大学部図書館内 TEL:0422-45-4145